

ある愛の記録

保坂弘司

學燈社

ある愛の記録

保 坂 弘 司

學 燈 社

著者との諒解に
より検印を省く

ある愛の記録

昭和36年6月25日 初版発行

昭和36年10月30日 4版発行

著 者 保 坂 弘 司

発 行 者 石 井 時 司

東京都新宿区東五軒町49

印 刷 者 杉 山 雄 威

東京都新宿区西五軒町32

発 行 所 株式会社 學 燈 社

東京都新宿区東五軒町49

電話 (301) 3596~8

振替 (東京) 36253

¥ 270

序にかえて

妙な書名だとは思うが、どう考えてみても、これは「ある愛の記録」という以外に、名づけようのないものだ。青春のある時期の私を激しく全身的にゆすぶった愛情は、恋愛に似て恋愛ではなかった。姉弟愛に似てそれともちがっていた。ふかぶかとした友情のごとくであって、またそれとはまったく似ても似つかぬもののもうでもあった。そして、恋人のごとく、姉のごとく、時には肉親の母のごとく、私と陸び合ったそのひとは、ある日、その無償の愛をのこして私から姿を消し、再び現われることはなかったのである。だが、そのふしぎな愛は、そのふしぎさのゆえに、その時の私の生の襞^{ひだ}を限りなく充たしてくれた。実を結ぶことの無かったこの愛は、じつは、私の場合、私の青春をもっとも豊かに実らせてくれたのであった。あるいは、若き日の愛情とは、そのように恋愛とか友情とかきめることのできないのがほんとうの姿であり、私の体験した愛の相似形は、どの若い人たちの胸にも秘められているのではないか、とも思う。これは、私の下グマであろうか。作家でもない私がこの自伝小説を世に問うのは、このたしかに味わった一つの人生体験を忠実に記録して、この疑問に対する多くの批判を受けたからでもある。

いずれにしても、この書は、「ある愛の記録」と名づけるのが、もっとも私の作意になつてい

るのである。もう二度と書くことのないこの自伝小説のために、もっと気の利いた名前をつけたかったのだが、けっきょく私はこのもっとも平凡な題名を選ぶことにした。

昭和三十六年五月

著者しるす

ある愛の記録

東京では木瓜の花は、桜の咲く頃に開く。色や形の感じも桜に近いが、桜が誇るように咲き盛るのに比べて、この花はまことに淡々と咲く。その飾らない咲き方がかえって私になつかしいものを感じさせる。

私は木瓜の花をみているうちに、吉村美知子さんのことを書くように思い立った。古人は花檜の香でむかしの人を思い出したという。私はこの花で美知子さんの思い出を蘇らせたわけだが、これは木瓜の花が美知子さんのイメージに通うものがあるからというのではない。いや、もちろん記憶を辿って彼女の持つニュアンスを分析してみると、それもないとはいえないが、おもな理由はほかにある。しかし、この手記を読む人がはたしてそう感じてくれるかどうか――。

美知子さんと私との間に、九州と越後という遠い距離で文通がはじまったのは、中学生の私が発行していた『若人』という謄写版の文芸雑誌が、全国的に読者を獲得するようになった頃だった。

一 中学生の謄写版雑誌が全国的にひろがったなどと書くとき、思いあがった言い方のようにだが、事実だから仕方がない。これには二つの理由があった。その一つは『みづゑ』という絵画雑誌の取り持つ縁だった。この雑誌には読者欄があって、そこで愛読者同志が通信で自作画の交換をやっていたが、絵の好きな私は、この欄を通して各地の絵画好きの少年を求め、盛んに描きながつては交換した。こうした絵画好きの少年たちは、きまって文学好きでもあって、その大部分が『若人』の誌友になってくれた。

もう一つは、中学三年の冬に書いた私の「女教師」という小説が、当時実業之日本社から出ていた『日本少年』という雑誌の懸賞小説に首位で当選したのが契機であった。懸賞小説に応募するのは、まったくはじめだったが、ときどき『若人』に発表する私の創作が好評で、小さな鼻をうごめかしていた頃だったので、いくらか期待していたものがあつた。しかし、当選してみると、田舎少年の私は嬉しさより、戸惑いがさきにくた。ところが私をもっと面喰わせたのは、全国の中学生や女学生から降るように集まってきたファンレターだった。私はたいへんな思いで毎晩一つ一つ返事を書いたが、その中の文学好きらしい十数人との間にペンフレンドが成立した。すぐに彼等は、例外なく『若人』の誌友になってくれた。こうして『若人』の部数は飛躍的に伸びたのである。

このペンフレンドの中に、大分県S市の藤原弓雄という、やや年上の文学少年がいた。彼からの手紙は、非常に頻繁であり、内容もどこか情熱的だった。

私の「女教師」という小説は、弘一という貧しい商家の少年を主人公とし、彼を愛する美しい女教師とその愛に反撥する少年の歪みの心理を描いたもので、いくらか私自身の小学校時代の姿がモデルになっていた。私の家は精米所を兼ねた米屋だった。

弓雄君からの最初の手紙は、ずいぶん分厚なもので、それには、貴君の「女教師」という小説に書かれた女教師と少年との関係は、私の過去にあまりにも似ている、貴君もきっとそういう過去の体験を書かれたに違いない。貴君とは兄弟のような気がしてならない、遠く離れているが、生涯の交際をしたい、という意味のことが綿々と書きつらねてあつた。

この未だ見ぬ友の熱っぽい手紙は、私の心に異常な感動を呼び、その言葉の一つ一つが意味を越えて深く意識に沁みた。早速私は返事を書き、激しい手紙の応酬がはじまった。弓雄君は、手紙によると、その町の裕福な下駄屋の息子らしかった。カメラファンであるらしく、手紙の都度いろいろな身辺の写真を送ってきたので、彼の風貌も、住んでいる部屋の様子も手に取るようだった。写真でみる彼は、色白の貴公子で、どこか病身らしく見受けられた。彼の背後にはぎっしり文学書のつまった書棚が見えた。

私はつねに威圧を感じた。だいいち弓雄君にこたえて一枚の写真を送ることも容易ではなかった。彼は自分の周囲の出来事を、親戚の娘たちとの交際や文学グループの会合やらを、華やかに書き綴ってくるが、私にはそれに対抗するなんの話題もち合わせていなかった。私の若い文学は、外面いかにもみずぼらしい旧舎少年の、無表情的沈思の世界に、空想を羽搏かせて描き出された幻想にちかひものであった。内へ内へとひろがっている思考の鬼子だった。しかし、それにもかかわらず、彼の手紙はふしぎに私を慰めた。それは未知のさびしい魂を託う愛情と、私の文才への過大なまでの期待が行間に漂っていたからである。私は、自分がその中の一人であるかのような楽しい幻覚で、彼の生活の描写を聞くことができた。

彼からの手紙がとぎれると、私は妙な不安を感じた。学校から帰ると、真先に玄関の間に据えられた古机の上を探した。そこには、父のメモの書き散らしとともに、その日の新聞や手紙の類が置いてあった。その中に太ペンで書かれた弓雄君の達筆な封筒を発見できない日が一週間もつづくと、私は明らかにいらいらした。それはまさに同性愛に似た感情であった。

ある時の彼の手紙には、いつもに似ない乱暴な鉛筆の走りがきで、こんなことが書いてあった。

ぼくは今日、あることから、考えたんだ。——人間には死ぬという事実がある。そんなことは判り切っているのだが、この想念がぼくにときどき急病のように襲いかかってくる。ぼくが病身だからかも知れない。そんな時ぼくは無性にひろしさんに逢いたくなる。世の中に心中という言葉がある。今日読んだ本によると、「心中」とは、愛する二つの魂が永遠に結ばれて生きる唯一一つの方法だそうだ。ぼくは自分が駄目になるとき、ひろしさんに逢ったら、きつと殺して無理心中するだろう。だから逢わない方がいい。しかしあなたは伸びる人だ。ぼくは名もなく果てる人間だ。それもそんなに遠いことではないらしい。すると、ぼくがひろしさんと心中するにはどうしたらいいかと思ひ直したとき、やっぱり逢った方がいいという決心がついた。逢ってぼくを全部あなたに移そうと思う。そうすればぼくの肉体は滅びてもあなたによって生きられる。ほんとの「心中」が成立するのだ。これを決心したら、ふしぎな喜びが湧いてきた。

読み終つて、私はそくそくと懼れを感じた。しかしやがて懼れの中から、甘美なものがせり上ってきた。「ぼくをあなたに移す」とはどんなことを意味するのか。想像もできなかったが、ぼくもぜひ逢いたいと思う、と返事を書いた。彼の手紙はいつも長く積極的で、私の手紙はたいへん短かく受身であった。

すぐまた返事がきて、ぼくの決心に同意してくれて有難い、逢う場所は奈良にしたい。時期は来年の新緑の頃にしよう。あそこはぼくの一癖好きなどころだし、新緑の奈良は素晴らしい。それにあなたの国からもぼくの国からも等距離にあるのが、一生に一度の結びつきにふさわしい条件だ、とある。それから熱病につかれたような手紙が立て続けに数通来た。

その中の一通にはこんなことも書いてあった。

ぼくはだんだん健康に自信がなくなってくる。それでひろしさんにはもっと早く逢おうと思う。今年の秋ごろのつもりで、いま計画を立てている。あなたの旅費はそのうちかならず送る。それから、ぼくにもしもの事があつたら、ぼくの書斎の本は全部あなたに譲りたい。そのことを今から遺言として書いておくつもりだ。

彼の手紙には、どういうわけか、いつも病氣そのものについてはなにも書いてない。それで私は、弓雄君の病氣というのは、文学青年にありがちな自虐的表現の一つだろうと考えた。過剰なセンチメンタリズムが病身の彼自身をことさらに誇大に幻想させ、甘いよろこびに陶醉させているのだ。これは手放しで同調してはならないぞ、とかすかな反撥が私の心を掬めた。しかし、すぐまた、そんなふうに関心の友のことを懷疑する自身があさましくなつて、思い返すと、今度は弓雄君の細い身体が暗々とした病の葉のようにも思われて来て、あわれだった。この二つの心の揺曳の間には、写真で知っている彼の本棚が醜にちらついた。あれだけの本があつたら、楽しいだろうな——ふと、私は弓雄君の死ということと切斷して、そんな空想をめぐらし、気がついてはっとした。

しかし、弓雄君の表現は誇大でも自虐でもなかった。彼はまるで自分の予言のなかに胡座あぐらでもかくように、靜かに病床に横たわる身となつた。病院から発信した別人かと思われるくらい文字の崩れた鉛筆がきの手紙が私に届いた。

とうとう来るべきものが来た。運命の陥穽におとされた。ぼくは自分の病氣については、ひろしさんに一言も書かなかつたが、だいたい察してくれると思う。ぼくにはあなたとの約束が果たせなくなったのがなにより残念だ。しかし、これは別の方法で解決する道がある。いまはもう少しこの病氣の経過をみてからにしたい。それとは別に、ぼくはひろしさんに謝まらなくてはならないことがある。ぼくははじめあなたを「遠い弟」と思おうとした。ところがいつか「同性の恋人」になつてしまった。そうなつた時、ぼくは言うべきことを言ひそびれた自分に氣がついた。じつは、ぼくには幼馴染の恋人がいるのだ。許婚いびんといつてもよいくらいの間柄だ。美知子という。いま彼女はぼくの病床の側で、横顔を見せながら本を読んでいる。

ぼくはなぜ早くあなたに打明けられなかったか。自分にも判らない。ただ、異性の愛と同性の愛は異質のものだ、と思うのだが、それでいてこれを打明けたらひろしさんとの愛情関係が今まで通りでなくなるような氣がしたことは事実だ。でも愛情というものはそうはっきり割り切れないらしい。愛情とは性を越えた何かなのではないのかと思われてくる。しかし今はもうそうしてはいられなくなった。なぜなら今日ペンをもつことを医者から嚴禁されたからだ。この宣告を受けたとき、ぼくのひろしさんへの思いが激しい炎となつて燃えた。これからぼくはどうして自分の激しい思いをあなたに伝えるべきか。そのとき、ぼくは美知子の存在に氣がついた。そうだ、美知子を仲介として文通すればいい——そう思いついたとき、ぼくの心はようやく落着いたのだ。これからは、美知子がぼくに代つてあなたに手紙を書くだろう。さっき美知子にあなたのことを打明けたら、かえつて喜んでくれた。彼女のよろこびの意味は單純だ。ぼくとぼくの病氣のためにだ。しかし、そこから反射するぼくのよろこびは複雑だ。ぼくとひろしさんの愛にとつて彼女はもはや單なる道具なのだ。ひろし

さんはどう思う？

読み終つて、私は凝然とした。彼の手紙は、どれもみな、私をどき、つとさせるなにかを含んでいたが、この手紙には底知れぬ妖気のようなものが漂っていた。この頃私はフアーブルの「昆虫記」を読んでいたが、その中にセリセレスが弱い虫を描えてその虫の神経機関だけにとどめを刺して、動きのとれない状態で生かして置く、という記事を読み、言いようのない懼れを感じた。弓雄君の手紙は私にそれと同じ作用をするようで、不気味だった。立ちすくんだ心で、返事を書けないところへ、今度は石竹色の封筒の女文字の手紙が届いた。美知子さんからだった。御家流というのか、綺麗な筆跡である。

はじめてお手紙差上げる失礼をお許し下さいませ。弓雄さんがぜひにと駄々をこねますので、重いペンを執りました。お手紙を差上げるのが嫌なのでなく、文章が下手なので、あなた様のような方にお書きするの、気がひけるのでございます。それでも、私の努力がお二人の美しい友情にお役に立てばと思い、心を強いて、弓雄さんの口写しようなお手紙を差上げます。

私にお手紙を書くように命じた御当人の弓雄さんはいま眼をつぶっています。病院の庭の青葉がその顔に美しい緑の影をおとしています。弓雄さんは、御自分の意志では秋までに癒つてあなた様との約束を果たしたいのだそうでございますが、病院の先生のお言葉によればとても無理なので、せめてすこしよくなって軽い散歩も出来る春頃に、こちらへお呼びしたいと申しております。それから、こちらから出来ないのに、勝手なお願いになりますけど、いまままで通りお手紙をいただきたいと、くれぐれもお願いしてくれとのことでございます。

束筆ながら、本日小包をお送りいたしました。弓雄さんが心をこめての指図の品、友情の記念にお受取り願います。どうぞございます。

弓雄君の熱っぽい手紙とは対照的な、やさしい文面だった。小笠原流とでもいいたような非常に丁寧な言葉

づかいから、私は気品あるつつましやかな女性を想像した。そして、弓雄君が最後の手紙で懸念したような気持はすこしも私に起ってこない。それは極めて自然なことと思われた。弓雄君の病気が私に確認され、遂う希望が絶たれたと感じた瞬間、灯の消えたようなうつろさが来たが、二人の間に突然つつましやかな女性の出現したことは、そのひとが彼の恋人であるにもかかわらず、うつろさの間に一筋ほのぼのと温いものの流れる思いだった。恋らしい恋の体験をもたない私は、この事態がひどく高貴に感じられ、美知子さんは二人の間の「女神」であつてもいいではないか、と真面目に考えた。

それにしても美知子さんの手紙に「美しい友情」とある。彼はわれわれの関係について彼女に嘘を言っているなと思った。そうしないわけにゆかぬ彼の気持は判るのだが、割り切れない思いだった。

二三日して、小包が届いた。彼の愛用の品らしいオリブ色の電気スタンド、煙銀のインク壺のセット、古代エジプト模様の浮彫のある本立が、幾重にも新聞紙に包装され、きちんと組み合わされてはいつていた。かねて、彼の書齋の写真を通じて私のよく知っている品々で、それらは彼の机の上に置かれた全部だった。

ことによると、もう再び自分の書齋に帰れない身と知って、ひそかに私に形見分けをしたのかも知れないぞ。――胸の辺をひたひたと弓雄君の愛情が浸してきて、私は噎せるように視線をそらした。

懼れのまじらない恋情がはじめて彼に感じられた。すると、にわかに、この同性を死なしてはならないという思いが私の心にこみあげてきた。

――そうだ、ぼくは美知子さんと力を併わせて、あらゆる方法で彼を病魔から奪い返さなくてはならない。三人の關係は、世にもふしぎな美しい愛情の三稜塔なのだ。どれが欠けても、われわれの關係は駄目になってしまう。もし、この宇宙に意志（それは世間でいう「神」かも知れないが）があるなら、こういう美しい人間關係を真先に支持し、彼の病氣を癒してくれるはずだ、そういう力がなければ、宇宙なものもあるものか。

私の心は次第に熱してきた。私は哲学も宗教も知らなかったが、幼い思惟がいつか形而上学的な世界にはいつてゆき、そこに白熱した愛情の塔に立つ神々のような三人をありありと描くのであった。私はそのことを、その

まま弓雄君と美知子さんに書いた。

だが、それはついに青春の日の白日記にすぎなかった。限りなく美しいと思った三人の関係は、やがて音立てて崩れる日が来たのであった。

2

こないきさつを書くとき、私は蒼白い文学少年であつたかのようなだが、これは私の内面生活ともいふべきもので、中学生としての私は、よそ日には颯爽たるスポーツ選手であつた。やや瘦型ではあつたが、身長五尺六寸、体重十七貫の私の身体は、中距離陸上競技選手として、けつして見劣りのする方ではなかつた。対校競技では四百メートルと八百メートルとに主力を注いだが、三段跳と走高跳にも出場した。

競技部の部員たちは、すでに秋の県大会を日ざして、組織的な練習を開始し、潮風のわたる海浜のグラウンドで日没まで猛練習するのが慣わしになつてゐた。もちろん私もその一人であつた。晴れの県大会で、私は四百メートルと千六百メートルリレーと三段跳の三種目に出場するように予定されていたので、練習時間も自然他の部員をオーバーした。

連日の練習で潮風に焼け、砂埃のしみついた私の顔は、漁師の子のようで、眼だけがぎらぎら光つてゐた。およそ文学からは遠い顔だつた。良家の出で品のよかつた母は、そうした私の形相が彼女の感覚に疎ましかつたらしく、いつも本名を呼ばず「荒熊さん」と呼んでゐた。

この荒熊さんは、しかし、夕食を済ませると、まるで別人のように文学の虫になつた。『若人』は月一回の発行だつたから、——実際には隔月になつたり、二月置きになつたりしたが——ほとんど毎日のように原稿の整理をしたり、ガリ版の原紙を切つたりしなければならなかつた。深夜、薄暗い電灯の下で原紙を切る音のわびしさは、時に「ぼくは、こんなにまでして雑誌をやつてゆく必要があるだろうか」という懷疑を呼ぶこともあつたが、

文学の妄執にとりつかれた私はすぐ激しく頭を振り、「やり抜くんだ」と、再び鉄筆をとりあげた。また、その間には、読む方も怠ってはならないと思い、あちこちの友人から小説の類を借りては盛んに読んだ。その頃、もう日本の作品に飽きていて、外国文学を読み漁ったが、とくにフランスのモーパッサンの短篇が好きだった。

こんなわけで、中学四年生の私の中にスポーツ選手と文学少年とは、まったく矛盾なく、そしてまたまったく無縁に同居していたのである。こんなことがあった。ある日の放課後、小松という同級生の家に遊びに行ったら、近く転任することになった校長が小松の父親と酒を飲んでいた。町の有力者である彼の家に挨拶廻りに来たのである。小松と私とが小さくなってその席へ挨拶に出ると、御馳走酒に赭顔を一段と赤くした校長は、私に眼を据えて、

「保坂は文武両道に達しとるわけじゃな」と言った。おおげさで古風な表現が全身にこそばゆかったが、少しばかり小鼻のうごめく感じがしなくてもなかった。しかし、このような背反的なものの同居生活は、けっきょくは私自身を消耗しないはずがなかった。一年、二年と首席であった私の成績は、三年から下り出し、四年になったこの頃では、試験直前の一夜漬け勉強でやっと五六番目あたりを保っている状態であった。

青葉が黒いほど濃くなって、北の国の夏がやってきた。合^あ飲^{ちん}の花が砂丘の陰に物憂げに咲いた。

弓雄君の病状をつたえる美知子さんの手紙は、十日に一度ぐらい、ときには二週間に一度ぐらいの間遠ざかった。病状に急激な変化のない病氣らしいから、それが自然なわけだ。それに弓雄君との文通は心の内側の語らいであったのに、美知子さんとの文通は外面的な報告なのだから、そんなに書くこともないわけだが、そう判っていないがら、美知子さんの手紙が待たれた。

弓雄君の時には、受身で後れがちだった私の返事の手紙が、美知子さんになってから、手紙さえくれば、待ち構えたように返事を書くというふうになった。その理由を、私はこの人の手紙の持ついいようもないやさしさのせいにした。

この頃の私には、女名前の手紙はけっしてすくなくはなかった。謄写版雑誌『若人』の誌友の三分の一が若い女性だったからである。しかし、この女性たちからの手紙のほとんどは、青白い文学熱に浮かされたような文章が並べられてあった。肩肘を張った文学論、観念的な人生論、ペダンティックな時評などの応酬——それも楽しくないわけではなかったが、どこかに空疎なものがあって、私の若い主観に一抹のさびしさの纏わりつづけるのをどうすることもできなかった。ありあわせの知識を絞りつくしてそんな手紙を書いたあとのうつろさの中に、美知子さんの手紙の匂いがほのぼのと甦ってきた。なにかを持っていながら気どらないそのやさしさ——それは私に恵まれない『恋人』と『姉』の二種類の愛の溶け合ったなつかしさに似ていた。

といっても、現実には私と美知子さんの間には、弓雄君を抜きにしてなにもも存在していないのである。たしかになにもも存在しない、という明白な事実が、しかし、なぜか私にかすかな淋しさを呼ぶようであった。ある時、私は手紙の終りに、ふと、お手紙の言葉を通じて美知子さんのお人柄を想像したりしています、と書いた。

その次の美知子さんからの手紙は、思いの外に早く来た。

あなたは、私たちの住む大分を南国とお考えのようですが、ここは南国という感じからは遠いようです。でも、ここ二三日、南国のような暑さがつづき、この病院の窓から眺めやる樹々が度ぎつい影を白壁におとしております。

このごろ藤原はすこし衰弱したようです。医者は心配ないと申すのですが、本人は焦立ち気味で、一日に二回も三回も私を病院に呼び寄せるといふ駄々っ子ぶりです。それにちょっとしたことで神経を突らせ、激しい言葉を投げつけるので、悲しくなりますわ。昨日はレルモントフの「現代の英雄」がきっかけで喧嘩してしまいました。私が遠いコーカサスのようなところへ行きたいな、といったことが気に障ったらしいのです。もっともそれには藤原が私に衝動的にしかけたことを拒んだせいもあるのですけど。病人の神経、ご想像にお任